

ピシッピシッツ——

尻たぶを強く鞭うたれ、雄茎が<sup>のぶか</sup>篋深く刺さったままの尻をきゅうッと引き締めてしま  
まう。きゅんきゅんきゅんきゅんッ——♡♡♡驚いたように内壁が痙攣し、淫楽が  
怒涛のように体内に吸い上げられる。

「んう”…ッ♡♡あ…♡んう…ッ♡♡」

あまりの快感に耐えられず、力をふり絞って逃げるように腰を浮かすと、そこもま  
た、地獄だった。すっかり濡れ潤った孔内が、上方へ腰を動かすたび、ずりゅッ  
♡ずりゅ…♡となかで擦れ、卑猥な疼きが生まれる。

ヒクヒクッと入口までもが収縮し、男を孔全体で頬張ろうとしているかのようだ。

「はあ…っ♡ん…♡♡んう…♡♡♡あ…♡ああああああ…♡♡♡♡」

雁首に到達した瞬間力尽きて、ずちゅんッ！♡♡♡と勢いよく座り込んでしま  
う。脳天までまっすぐに悦楽の柱が貫通し、目の前が真っ白になる。しかしそん  
な状態になってさえ、男たちは容赦してくれない。

「おらッ、休むなッ」

「速くしろと言ったはずだぞ」

ピシッピシッピシッ——

「ああ…ッ♡♡あ…ッ♡ああああ………ッ♡♡♡♡」

立て続けに尻を打たれ、きゅんきゅんと内壁が窄まりながらも、追い立てられるように上方へ腰を浮かす。

せめて手を縛られてさえいなければ、手を男の腹について重心をとることもできるのに、下半身の体力に掛かったこの運動が長続きするとは思えない。

それでも鞭うたれればじっとしているわけにもいかず、孔内でますます膨れ上がる雄茎の気配を感じながら雁首にたどりつき、今回もまた、

「あ”ああああ………ッッ！♡♡♡♡」

ぶちゅんッッ！♡♡

重力に負けて座り込むと、結合部からは男のものか少年のものかもわからぬ体液が四方に散る。

灼<sup>や</sup>けつくような悦楽にまっすぐ脊髄を駆けあがられ、同時に腕の力も限界に達する。背後の両手首から繋がった首の縄がきゅっと締めりながら、孔からの悦楽が全身にうち広がる。

「…ツ……ツ……！！♡♡♡♡♡♡」

呼吸を封じられたままだと、狂おしい快感がいつそう体内で滞留し、白目を剥きながら全身を痙攣させる。

「啞えろ」

「ん”う…っ！♡」

さらにはそんな若い男の言葉とともに頭を上向かされ、唇から熱いものを押し込まれる。

尻に挿入<sup>はい</sup>ったままのものと同じ、どくどくと不気味に脈打つそれを、有無を言わずずっぽりと喉奥<sup>そうにゆう</sup>にまで挿入される。

「ん”…っ♡ん”う…っ！♡♡」

ただでさえ喉が締まっているのに、太い雁首にまで喉を圧迫され、苦しさに慌てふためく。どうにかしようと手首に力を込めると、混乱していたのか逆に縄を引っ張ってしまい、ますます喉が締まる。箸を挿された幼茎に甘苦しい疼きが駆け下りながら、無我夢中<sup>きゆうき</sup>で吸気のありかを探す。